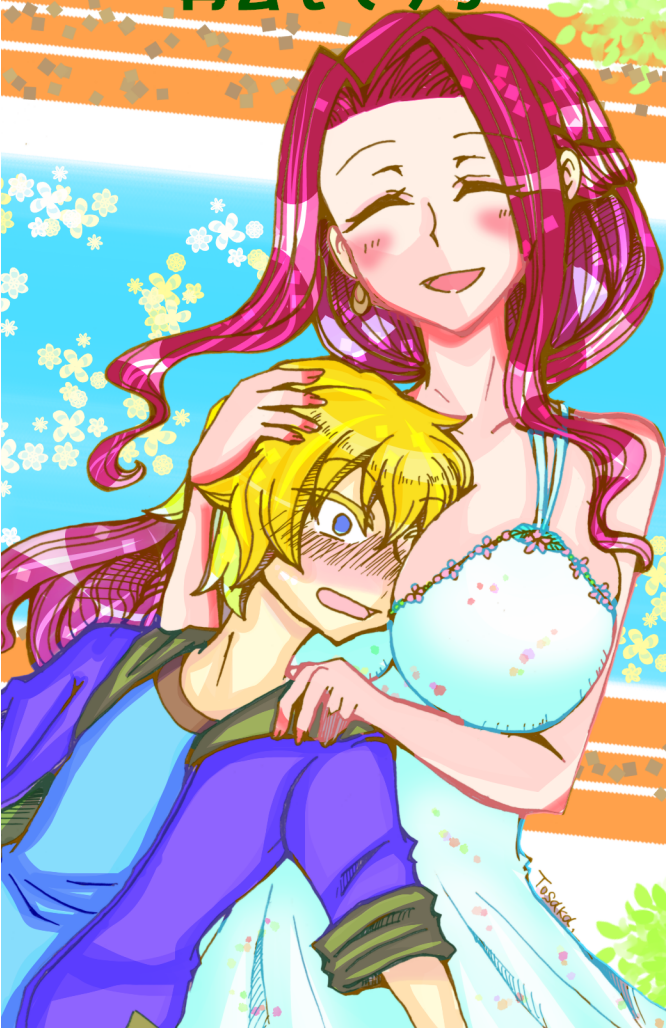


小説屋白石華

再会してから





再会してから

白石華

白石華

表紙・挿絵
とさか

目次

僕の秘密

7

お姉さんとの再会

10

誘われるまま、化粧へ

14

キスと確認

22

僕とお姉さんの気持ち

34

お姉さんとお買い物

42

お姉さんにご飯

48

お姉さんとお風呂でエッチ

62

お姉さんと、お休みなさい

70

僕の秘密

「……お姉さんに、なんて顔をして会いに行けばいいんだろう。」

僕は久しぶりに会う、お姉さんに会うのが戸惑いを隠せなかった。

ぼくのお姉さん。お姉さんと言っても血が繋がっている訳じゃない。子供の頃、近所で遊んで貰っていたお姉さんだ。それでまあ、人並みに初恋とかもしていたのだが、ぼくが学園に入学する辺りでお姉さんは大学生になり、そのまま離れ離れとなる。その後、お姉さんは結婚したと聞いたのだが、ぼくが大学に進学する頃、旦那さんが亡くなった訳で。その辺りのゴタゴタは置いておこう。それで、お姉さんが独りになり、その間、ぼくは……慰めてあげたかったのもあつてか、両親との許可も得て、大学と距離も近いし、お姉さんと同居する形で住まいを借りることとなった。

とまあ、それだけなら、僕の甘酸っぱい思い出の続きをお姉さんの傷を癒しながら送って貰わせる日々を送ることになるのだろうが、一つだけ、違う事があった。

僕の秘密

7

「僕……お姉さんに綺麗になったねって言って貰えるかな。」



大学生を期にそういう趣味を謳歌してもいいだろうという事になり。それまでは誰にも言えなかった……女装癖があったのを、お姉さんだけは知っていたのだった。と言うよりも、女装するためのおさがりの服や化粧の仕方をみんなお姉さんから貰って教わっていたため、僕とお姉さんだけの秘密だったのだ。

お姉さんとの再会

10

「あら、久しぶり！ 本当に来てくれたんだ。」

「お、お姉さん……。」

再会してから

僕は部屋に入ると、お姉さんが出迎えてくれた。お姉さんの家は新居で。作られたばかりの家だ。確かにここに一人で住むのは何かとあるのだろう。

「えつと。うん。来ちゃった。」

「ふふ。これからは、部屋に戻った時は『ただいま』って言うて。」

「う、うん。ただいま……。」

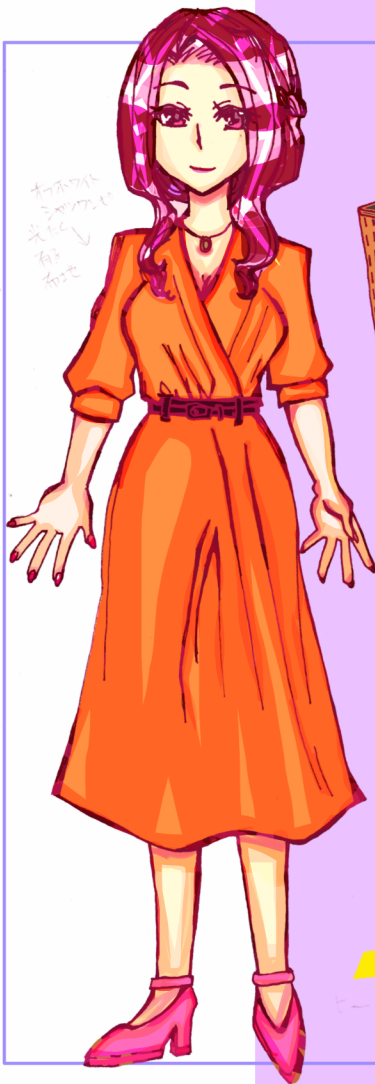
「お帰りなさい。誰も言う相手が居なくなっちゃったから。」

「ちよつとだけ張り合いが出るの。」

「そうなんだ……。」

お姉さんは僕を見て愁いを帯びた寂しそうな眼をしていた。

「ううん、君が悲しむことじゃないのよ。それに。」



調子 変な
なまかた

← 変な
千の何回
女の何回
なまかた

ヒール: 富に低め
ホリ

「あつ。」

お姉さんが僕の頬に両手を包むように当てる。

「君が来てくれたんだし、それに……。」

お姉さんがうつとりしたような表情で僕を見る。

「スキンケア、ずっとしていたのね。綺麗な肌……手にすぐ馴染むわ。」

「お、お姉さん。」

「私が君に、女の子になる方法、教えてあげたの、ずっと守っていたんだ。」

「う、うん……。」

僕が女装……きっかけは母親が化粧をする姿を見ていたのを興味深そうに見ていた時だった
が、それは女の人だけがするものだ、どことなく羨ましそうに見ていたのをお姉さんに知ら
れてしまい。お姉さんは二人だけの秘密にしようと、僕におさがりの服を着せてくれたり化粧
の仕方を教えてくれたりしていた。それで僕は女装が誰にも言えない趣味になったのだが……。

「じゃあ、女の子になってみる？」

「そ、その前に、お姉さん、僕……僕を見てどう思う？」

「ええ、綺麗よ。とっても。」

「う、うん……。」

僕はお姉さんに言っただけで、想像していたよりもずっと心臓がドキドキしていた。

「ね、こっちにいらっしやい。」

「うん。」

僕は鏡台のあるお姉さんの寝室に導かれていった。

誘われるまま、化粧へ

「お化粧はしてこなかったのね。」

お姉さんが僕の顔に下地を整えながら話している。

「うん。僕、男の子だって言っているのに。」

女の子の姿で出入りしたら怪しまれると思つて。」

「私は構わないわよ。」

お姉さんはアツサリと僕の女装を気にしないつもりでいてくれるようだ。僕としてはこれから大学にも通うようになるのだから、そんな訳にはいかないのだけど。

「それに大学生でしょ？ 通う学校も共学だし。」

大学生になったら、女装癖もある男の子って受け入れられるわよ。」

「そういう心の広い人とかもいれば、毛嫌いする人だっているんだってば。」

「あら。君の女装趣味って、嫌いな人に遠慮するぐらいで隠しちゃうの？」

「うん。ご近所さんだってそこまで心が広いとは限らないよ。」

そううまくいくかな。こういうのってちよつとずつカミングアウトしていくもんじゃないかな。僕はそう思ったが、お姉さんは僕の女装をいたく気に入ってくれているためか、とても僕の肩を持つてくれている。それは素直に嬉しいことだから。あとは僕が自分で何とかすればいいだろう。

「今のところは、僕が女装を披露するのはお姉さんの前だけでいいよ。」

「あら、言うようになったわね。」

僕の返答に、お姉さんは随分と嬉しそうだった。

「じゃあ、そろそろお化粧していくわよ。」

「う、うん。」

女の人ができるお化粧。僕がしてもいいんだという、子供の頃感じた、ちよつとした悪戯心と、女の人ができる行為を僕がしてしまっているという何か不思議にドキドキした気持ちと、お姉さんが僕の顔に触れてくれているという行為に、いつの間にか僕は浸ってしまっていた。そ

れは一人でそうする時にも気持ちは変わらなくて、その時の気持ちを思い返すようにしてしまうと、いけないことをしているというドキドキが止まらなくなっていた。僕ってそういう事にドキドキする人間だったんだと、自分の中の願望を知ってしまった気分にもなった。

「はい、まずはファンデーションからね。ちよつと厚めに塗ってみようか。」

「ん……っ。」

お姉さんが指先で僕の顔に触れる。リキッドタイプから塗っているから目の回りや頬、あごの回りと塗っていかれていくが、指先でなぞるように僕の顔に触れられる感触に、何かぞわぞわした気分になってしまう。

「うっ。」

唇の周囲をなぞられると、動悸がしてしまっていた。

「ごめんなさい、唇は厭だった？」

「そ、そんなことはないから続けて大丈夫……。くすぐったかっただけ。」

「ええ。」

「う……。」

今度はお化粧用のパフで頬や額を粉の方のファンデーションが付けられていく。

「あとは。コンシーラーで顔の見せたくないところを隠して。」

部分用ペンのようなもので僕の顔から浮き出てしまっていたシミなどまで綺麗に消えていった。

「お姉さん、随分本格的なんだけど。」

「だって、人の化粧って楽しいんだもん。」

お姉さんはアツサリ答えていたが、そういうものなんだろうか。

「その内、君にもお化粧、して欲しいな。」

「う、うん。」

「二人で歩いて、お化粧品用品とかも見回ってみたい？」

「い、いいけど。」

お姉さんは随分と乗り気だった。僕も下心なしでお誘いに乗るくらいには興味はあるし、二人で行けば怪しまれなくなるかなという、やはり、女装に対する後ろめたさもあつたが。

「はい、今度はアイライナーね。」

「うん。」

お姉さんが僕にしてくれる化粧も整つてくると、段々、僕も乗り気になってきた。結構単純なのである。

「最後は……口紅。」

「んっ。」

お姉さんが唇の先にだけ薄く塗った口紅にグロスを塗ろうとするが。

「せっかくだから、グリッターが入っているのにする？」

「そうだね。」

終わる頃には僕もスツカリ、化粧に夢中になっていた。

「はい、終わり。ブレストパウダーも付けておくわね。」

「うん。」

ここまでしてもナチュラルメイクの範疇になるのだから、女の人の化粧はとても時間がかかるのだろう。本当だったら更に付けまつげやマスカラもあるのだから。アイライナーだけでも目の周りはパッチリするのだけど。

「君の場合は、ちょっと切れ長でまつげも長いし。」

アイライナーだけで目元をキリっとさせたわね。」

「そうなんだ。」

「うん。男の子に生まれてきたんだから。」

女装でもキリっとさせられるときはそういうのも個性にしましょう。」

お姉さんの男の子を女の子のような姿にすることに対するこだわりを見てしまった。

「うん。綺麗よ。」

僕の目の前にある鏡台の鏡を見て、僕を見るようにお姉さんがいう。

「ありがとう。綺麗になれたんだ、僕。」

「君は最初から綺麗だったわよ。」

「う……。」

何やら気だるいような雰囲気になってきた。

「ねえ、キスしてもいい？」

「え？」

お姉さんにうつとりした表情で見られている。



キスと確認

22

「えっ？ お、お姉さん？」

ドキドキしていたのは僕だったが、お姉さんも僕に女装させた後にうつとりした表情になつてしまひ。僕を見つめている。

再会してから

「君に化粧をしている時、ずっと我慢していたの。」

私、君にお化粧して、女の子の着る服を着せるのに、こんなに……。」

お姉さんはぞくりとしたような身の震わせ方をすると、僕の首筋をついと撫でる。

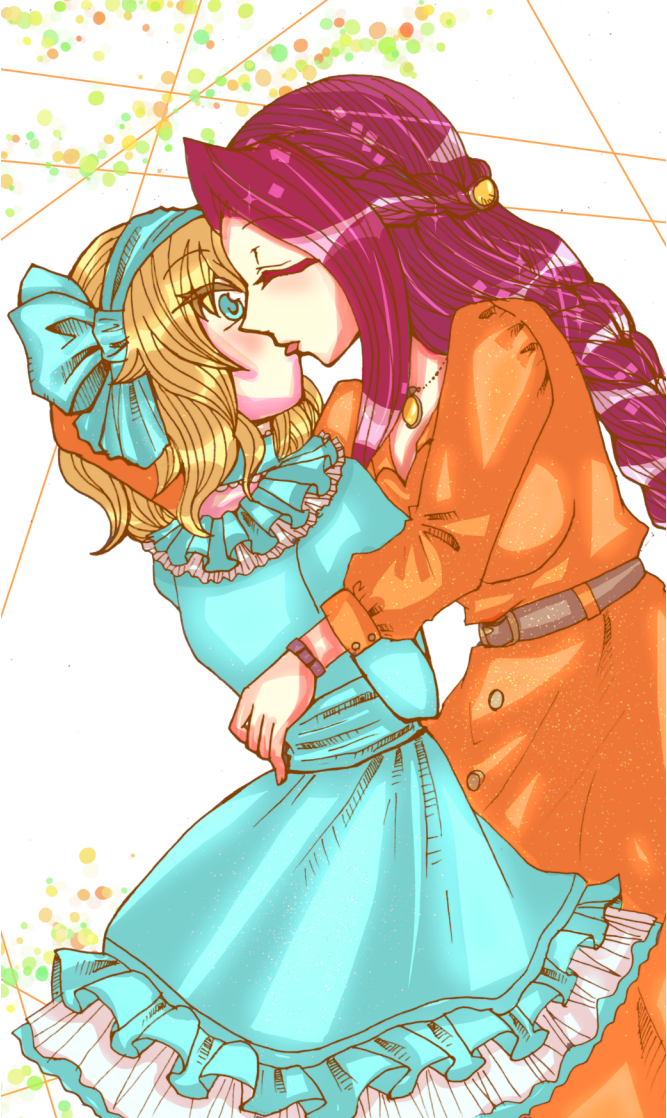
「お、お姉さん。あつ。」

お姉さんがゆつくりと僕の顔に近づけてくる。

「か、鏡に……映っちゃうよ。」

「構わないわ。」

「うう。」



「こんな気持ち、持つわけにはいかないから、君から遠ざかろうとしたのに。君からこっちに来るから悪いのよ。」

「お、お姉さん？」

「ふふ、お喋りはこのくらいにしておきましょう。」

「ん……っ。」

僕はお姉さんに唇を付けられてしまう。僕の付けていたグロスがぬめって、付けているだけでもぬるりとした感触がする。

「お、お姉さん。僕……あぶっ。」

「ちゆる……んっ、ちゅふっ。んぷ……れる、ぬちゅっ。」

舌が入り込み、そのまま絡め合ってしまう。

「んっ、んっ。んぶっ。……ぶあっ。」

お姉さんが突然僕から体を離す。

「ねえ……この先はどうしたいのか、君が決めて。」

「う……っ。」

「続きをしたい、もうやめたい？ 君の気持ちも、聞かなきゃね。」

「う……うう。」

このまま流されそうになっていた僕だったが、お姉さんにこの続きは合意か否かを求められているようだ。確かに。僕はこれから、お姉さんと暮らすことになるのだから、一時の気の迷いかどうか、確かめる必要はある訳で。

「続きをしたい……です。」

「……え。」

「僕、お姉さんにして欲しい。」

「……そう、だったの……。」

お姉さんの力が抜けていくようになる。僕にとっては、このまま流されてもよかったことだったが、お姉さんに聞かれてしまい（お姉さんにとっては当然のことだけど）、僕は答えてしまっ

だが、お姉さんにとってはそれが、とても意外だったようで。

「私の誘いを受けちゃうと、もう他の子とそうなりたいて思っても出来なくなるし。するときもこの格好なのよ？」

「それでも……いいよ。女装趣味を打ち明けられるの、お姉さんしか今の所いないし。」
「これから大学に行くんでしょ？ 可愛い女の子はいっぱいいるわよ？」

「僕は……お姉さんがいいよ。」

「君も……そうだったのね。それじゃあ。」

「何？」

「お洋服、着替えてみる？」

「……うん。」

お姉さんと僕は、着替えることになり。

「……ふふ。似合っているわよ。」

「お、お姉さんも……だよ。」

白いワンピースに二人で着替えたのだが、お姉さんがサツパリとした装いに對し、僕は割と、レースとフリルが多い。更にウィッグまで身に着けているのだが、

「……可愛い。」

お姉さんが僕を見て再びうつとりしている。

「お姉さんもだよ。」

「ふふ。ありがとう。」

お姉さんも嬉しそうで。

「それじゃあ、する？」

お姉さんも僕に声を掛けるが、さっきみたいな抵抗はなさそうだった。

「……うん。」

僕も頷いて、行為を続けることにした。

「君はベッドに寝て。」

「う、うん。」

お姉さんに言われるがまま、ベッドに横になると。

「わっ。」

「あら、怖かった？ ごめんなさいね。」

衣装を身に着けたまま、スカートを捲られてしまった。

「君、ハーフパンツだったんだ。」

形としてはボクサーパンツに近いが、レディースとメンズの間のようなショーツを僕は身に着けていて。

「う、うん。見られても、大丈夫なのにしようって。」

「今度は二人でも身に付けられるように、可愛いのを選んでみる？」

「そ、その内ね。」

「そう。なら今は。」

「あつ。」

お姉さんにパンツを脱がされてしまうと。

ぶるんっ。

「あ……っ。」

それに呼応するように空気に晒されただけで僕のものが大きくなってしまっていた。

「お姉さんので、してあげる。」

お姉さんはそう言う、スカートに手を掛け。

「わ。」

スルスルとお姉さんが穿いていたショーツを脱ぎ、するんと脚まで抜き取ってしまうと、僕のものに手を触れ、そして被せてしまう。

「君も、おチンポに被せるのに慣れれば、どうってことなくなるわよ。」

「あはは……そうだね。」

お姉さんは僕にそういう格好をさせてみたいらしい。

「じゃあ、しこしこ、びゅつ、て出しちゃいましょう。でもその前に。」

お姉さんは鏡台に向かうと、乳液を手にとってきたようだ。

「おチンポ、そのままじゃ辛いでしょ？ 濡らしてあげる。」

お姉さんは手で擦り合わせてぬちやぬちやと弄っていると、その手で僕のものに触れてきた。

ぬちっ。ぬちゅっ。

「ん……んっ、んんっ！」

お姉さんの手に包まれてぬるぬると弄られていると、僕は声が出てしまいそうになり、耐えてしまっている。

「声……出してもいいのよ。」

「だ、だって。ああっ！」

にちゅっ、ぬちゅぬちゅっ！

「ううううっ！ く……ああっ！」

お姉さんにショーツを被せられ、手で包まれたと思ったら扱かれてしまう。

「あつ、あつ。お姉さん、出しちゃう。」

「出していいわよ。出して……君が白いのを出すのが見たいの。」

お姉さんは、お姉さんのショーツにピッタリと包まれた僕を見ながら手つきがどんどん速くなっている。

「あつ、あつ。あつ。出しちゃう、出しちゃう！」

「出して、ホラ……私の中に。」

場所はショーツだがお姉さんは随分とノリノリだった。

「う……うううっ！」

最後は低く唸るような声を出してしまったが、それでもお姉さんのショーツに放ってしまい。

どくんっ。びゅくぶぶっ！

「あ……っ。」

お姉さんのショーツを白く塗り込めてしまっていた。

「……じゃあ、続きをしましょうか。」

「うん……。」

お姉さんの言葉に、頷いてしまっていた。

僕とお姉さんの気持ち

34

「それじゃあ、続きをしましょう？」

「あつ、ああつ、ん……っ。」

再会してから

僕の果てたばかりの肉棒に再びお姉さんが僕が出したのが付いたままのショーツを被せ、手で扱いてしまっている。

「……ん。」

「あつ。」

ぴくりと震えると、僕のが再び大きくなってしまっていた。

「……最初だから、生でしちゃいましょうか？」

「えっ？」

「大丈夫。お姉さんはそういう事は自分で何とかするようにしているから。」

君は、エッチの事だけ意識していればいいの。」

「う、うん……。」

それって、彼女持ちの男としてどうなんだという気もしなくもないが、ここはお姉さんの言葉に乗っておくことにした。元既婚者だし、そういうのも把握しているのだろう。何とかすると言うなら、僕の知らない知識だってあるのだろう。

「ね、それじゃあ……。」

「あ、ああっ！」

お姉さんがゆっくりと僕に覆いかぶさってくる。女の子の格好をしたまま、お姉さんとエッチまでしてしまうというのは……服装だけ見たら僕の肉棒にだけ違和感があるが。

「……ふふ。可愛い、おチンポ。」

「ううっ。」

「大丈夫……おチンポが生えていても、君は綺麗よ。」

「うう……。」

お姉さんにそう言われるとドキドキしてしまい、僕の肉棒は本当に肉棒になってしまう。

ずちゅうううつ。

「あ……っ、あああっ！」

深く呑み込まれるようにお姉さんの中に入っていくが、きつい締めまりというよりは広く、大きく、柔らかい締めまりに呑み込まれていくようだった。

「ん……っ、ああっ。」

お姉さんも僕の感触に目を閉じて受け入れているようだ。入り口でぴったりと包まれてしまふと、奥に行くと感じるのはひたすらに深く、温かく、柔らかいぬるみに覆われていく。かと思えば、抽送の刺激で蠕動を始める。

「どう？　これが私の感触だけど。思っていたよりも柔らかいでしょ？」

「う、うん。でもいいよ。僕。このくらい……柔らかくても。」

「ふふ。今は、こうしていて……。もうちょっとしたら、動いてあげるわね。」

「動くのも、お姉さん任せなんだ。」

「任せて言うか、最初はね。相性とかもあるから、君の方から動くのは……。」

「もうちよつと、動かし方を知ってから。」

「そうなんだ。」

ゆるゆると体を動かしながらお姉さんが話し掛けてくるが。お姉さんも既にブラウスをはだけているし、スカートも捲れて太腿も結合部も見えてしまっているしで、お姉さんの入れられている姿を見ながら動くのを感じるだけでも、結構来てしまう。

「……ふうん、もう動いてもいいのかな？」

「えっ？」

お姉さんの表情が変わったと思うと。

にじゅつ、にじゅつ、じゅにじゅぶっ！

「あああつ、あああつ！」

出し入れが激しくなってくると、さっきまでの穏やかさとは一変して、お姉さんの動きと、激しさが増していく。

「んんっ、はあっ。これだと……気持ちいいけど、私、すぐ終わっちゃうから……。

もっと君とはゆっくりしたかったんだけど……したそうだったから、しちゃうわね。」

「んっ、あああっ、お姉さあんっ。お姉さあんっ。僕……あああんっ！」

「ん……っ。」

気づいたときには女の子みたいな声を出して、力が抜けるようになって。お姉さんはそれを見ながら腰を揺すっているが、腰の動きにお腹から反るような動きが入ってくる。

「あっ……あああっ！ おチンポ……来てほしいところに来るうっ！ ああっ。

まだ……覚えていないはずなのに……どうして……えっ。」

お姉さんは僕の首辺りに手を着くと、乳房を揺らして、反るような痙攣を続けている。

「うあつ、ああつ、はああ……ああんつ。分かんないよおつ。おチンポ出しちゃうつ！」
「あ……ああつ。出して、出してえつ。君の……それ、卵子に届くまで出してえつ！」
「うあ……あああつ！」

ドクンつ、びゅぶぶぶつ、ずびゅつぶぶつ。びゅぶぶぶぶつ！

「あ……つ。これが、君の……。」

「うあ……ああつ。出しちゃう、出しちゃうよおつ。あ……つ。」

「……ん。」

「あつ。」

お姉さんが倒れてくると、横に二人で寝てしまい。その格好が……お姉さんに入ったまま。僕もお姉さんのおっぱいに顔を埋めてしまうようになっていた。訳で。

「初めてだったけど、君に何もかも、任せてしまいたくなっちゃったわ。」

「ええと、僕、反射で動いていたただけだったの？」

世の中にあるエッチの相性というのはそんなに違いがあるのかと僕も運の良さに驚いていると。

「そうじゃなかったら、君とエッチをしたからね。」

「う……。」

世の中にあるという、女の人の好きな人とするエッチは別、というのも存在していたのかと僕も再び、思っていると。

「良かったわ。自分がこんなになっちゃうとは思わなかったけど。君とのエッチでこうなれて。」

「そ、それは僕もだよ。」

「ええ。これからも、よろしくね。」

「……うん。僕も、こうなった相手がお姉さんでよかったよ。」

「ありがとう。」

「……はは。」

この人の前ではまだ甘えてしまうところがあるけど。いつか、かっこいい大人になったらと、その時の僕は思っていたのだった。

お姉さんとお買い物

「今日は、君が来てくれた記念日みたいなものだから、ご飯を食べに行きましょう。」

「うん、ありがとう。」

「何か食べたいもののリクエストとか、ある？ ガッツリしたのとか、アッサリしたのとか。」

「うーん……そうだな。春だから魚とか食べたい。春魚。」

今の季節は、僕の大学進学を期に引越してきた時期だから、冬から春に変わり目の頃だった。ソメイヨシノなどといった桜が満開とは言わないけど、ポツポツ咲いていて、早咲きの桜は既に満開を迎えている。花見もその内、したいなと思いつつ。僕も情緒だけはいっちょ前に大人ぶっていた。

「君ってやつぱり、嗜好は大人なのね。」

「大人とっていいのか微妙なところだけだね。」

見た目は多分、姉弟のような関係で間違いないのだろうけど。そこを詰めていきたいのが僕の希望だ。それはそれとして、ご飯はうまいものを食わせて貰えると向こうが言っている時は乗るのが子供の役割だろう。魚と言えば、どういうのかあるのか。

「アンコウやブリはギリギリ食べられるけど、今の季節、鯛やヒラメも美味しそうね。美味しい漬け丼や茶漬け、アラの出汁でとった、うどんとかあるわよ。」

ツマもね、野菜と海藻サラダみたいで盛り付けも綺麗なの。」

お姉さんがいきなり大人の力（うまい店を知っている）を発揮してきた。

「うん。アンコウ汁を出してくれて。」

お魚も刺身かフライか、煮付けで付けてくれるところにしましょう！」

「やった！」

という事で、お姉さんとそういうものが食べられる場所を回りながら、ついでに僕のこつちで買う生活必需品とか、あいさつ回りの物とかを買うことにしたのだが。

「花粉症のマスクミスト。」

「これはどうだろうね。」

今の季節、マスクが必需品の人などもいるだろう。お姉さんは生活雑貨店でギフトを見てみると、リップバーム、石鹸、ガーゼタオル、マスクにスプレーするアロマミストがセットになったギフトボックスを見ていた。他にもハーブティーとハチミツ、ミント製品のセットとか食べ物も置いてあるが選ぶチョイスが何と言うか、現代的である。僕にはサッパリの分野だった。

「こういうのは花粉症で悩んでいる人のリラックスタイムも兼ねた日用品だから。」

「そうみたいだね、見ていると。」

「あとこつち、桜のお茶とかもあるわよ。こういうのも和ハーブの一つなんだ。」

「へええ……。」

「大丈夫、つまらなくない？」

「ああ、それは大丈夫。僕の引越しの挨拶なんですよ？」

「近所の人、そういうのが好きなのかな。」

「そうなの。悪いわね。」

相変わらず、お姉さんは大人の力（現代的なお土産の店を知っている）を発揮していた。

「君も何か、買いたいものはある？」

「うーん。そうだね。お姉さんこそない？」

「えっ、私？」

「うん。僕もお姉さんに何か、お返しじゃないけど一つだったら買えそうだよ。」

「まあ。」

お姉さんは随分と嬉しそうだった。こういう時はそういう表情と反応で返すものなのか。なるほどと僕は大人の作法を見て学んでいると。

「この中で、どれがいいと思う？」

お姉さんは生活雑貨に置いてあった小さな細工のストラップ……キーホルダーにも紐や手提げのあるバッグのアクセサリーにもなるやつだな、の中で数点、見繕って、僕に見せている。

「持ち歩くから、君がいいと思ったのを選んで。」

「うん。」

僕は見ていると、魚、鳥、花、動物、オブジェ……よく分からない細工の中から選ぶとす

る。

（この中で、どれか一つがお姉さんがいつも身に着ける物なら、壊れにくい物のがいいかな。）

という訳で、僕は細くてもげそうな部位の少ない、壊れにくいそうな細工のものを選ぶと。

「へえ。透明なキューブの中にガラスが入ってる。可愛いわね。」

お姉さんの感触も良かった。

「これにするわ。可愛いから、どれを選んでいいか、分からなかったの。」

「うん。良かった。」

何を選んでいいか基準がサッパリだった僕は、使わない頭を浪費して大分疲れた気持ちでいた。

「待たせちゃってごめんなさいね、すぐにご飯にしましょう。」

そんな僕の顔色を見たのか、お姉さんはすぐに休ませてくれそうな場所に連れて行ってくれた。これが女性の気回しって奴か……と僕は話さなくてもエスコートしてくれるお姉さんのスムーズな立ち振る舞いに感心したと同時に、僕も早いところ、そういうところを見て動けるようにならないとなと思ったのだった。こういうのは無関心なままでいると、大人になってから苦労するからな。

お姉さんとご飯

「うん。美味しい。本当にツマまで美味しいね。」

「良かった。」

「鯛の漬け丼って聞いていたから、醤油で付けたのかと思っていたけど。

随分色が薄いんだね。」

僕は薄茶色よりも更に身の色が残っている漬け丼を食べていたが、それでもシツカリ調味料の味がしている。ダシのような旨味もあるし、昆布か何かでも入っているのだろうか。薬味もネギや大葉が刻んだのがあって、付け合わせに細かく刻んだ漬物や海藻類などもあった。何回にも分けて違う味を楽しめるようにとのことだが、ここまでしてくれるのだから日本の飲食店のサービスはすごいなと思うてしまう。更にこれでアンコウ汁も付いてくるのだ。

「……ん。アンコウ汁の味も、匂いがきつくないのに濃くて美味しいね。」

僕は味噌ベースになっている、鍋野菜と生麩も入ったアンコウ汁にも口を付けたが、大振りの身が入っていて、出汁もアンコウ特有のアツサリしているのにコクのある旨味もあって、濃厚な肝の味もして……と、アンコウの味を堪能する。

「ねー。冬になって、こっちに來たら、やっぱりアンコウは食べないと。」

「といつても、私も味を知るようになったのはこっちに住むようになってからだけど。」

「地元の味つて言うのは知つていたけど。」

「實際、食べてみて、美味しいと思うようになるのは。」

「舌が鍋で煮た魚とか野菜とかが美味しいと思えるようになってからだよね。」

「特にアンコウの場合、魚のぷるんとした皮や内臓まで煮るから。」

「そこで躓く人とかもいそうだし。」

「美味しいつて思うまでは敬遠する人とかもいるんだろうね。」

「その点、君は、大学生になる年齢でもお魚が食べたいつて言つてたけど。」

「親の影響かな。魚も結構食べる所だったからさ。刺身もワサビで食べるよ。」

「ふうん。好き嫌いつていつの間にか無くなつていくからね。」

「そうそう。自炊とかもして食べるものに苦勞するようになってくると。」

「何でも食べられるようにしてくれた。」

「親のありがたみを知るようになってくるとかそう言う。」

「自分で何でもするようになってくると、前もつて、やれる事はあつた方がいいからね。」

相変わらず、見た目と反する渋い会話を僕たちがしていると。

「お待たせしました。デザートになります。」

「おお。ありがとうございます。」

「わあ、綺麗ですね。」

俺たちの前に来たのはフルーツ抹茶あんみつだった。抹茶のシロップが掛けられたあんみつがとても見栄えがいい。

「日本だなー。」

「抹茶を食べていると、日本を実感するわよね。」

こんな調子で、僕とお姉さんは魚料理屋さんで日本のうまいものを堪能していた。

.....

「お帰りなさい。」

「お姉さんも。お帰りなさい。」

家に戻ると、荷物を整理して、着ていたスプリングジャケットとかを片付けている間に、お姉さんがお茶を入れてくれていた。

「疲れたでしょう？ はい、お茶。」

「うん、ありがとう。」

リビングでお姉さんに温かいお茶を出されてしまった。こういうところまで気が利いているから、お姉さんに気付いたら甘えてしまっている俺になっているが、家庭内墮落の第一歩だから、これを当たり前だと思わないようにしようと気構えを持っていると。

（あ。いい匂い。）

お姉さんの出してくれたお茶が生姜と、何か香辛料の入ったいい匂いのするほうじ茶だった。今回飲んだのはそのままだったが。ストレートでも、ほうじ茶ラテでも美味しそうな味だ。こういうのもお姉さんが生活雑貨店で買ってくるのだろうか。

「ありがとう。ホツとする味だね。」

「良かった。出したけど君の口にあつてて。」

「うん。目先が変わっていいと思うよ。」

僕とお姉さんはしばし、お茶の時間を堪能していると。

「ねえ、歩いてきて、疲れていない？」

「うーん。疲れたと言えば、疲れたかな。」

「それじゃあ、お姉さんとお風呂に入る？」

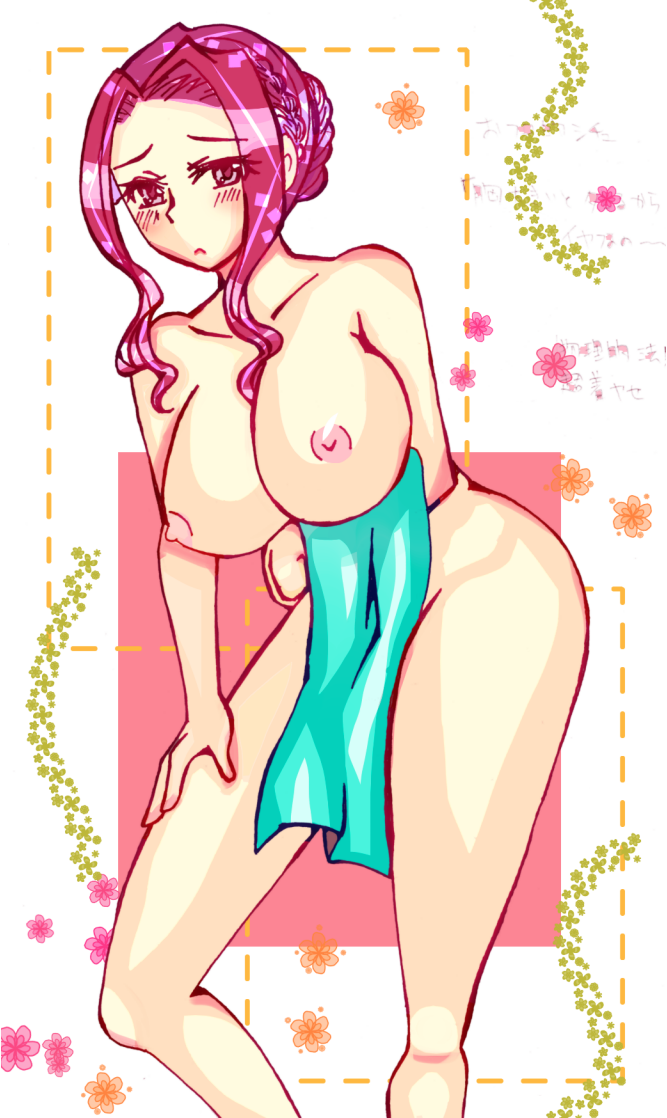
「えっ。」

.....

「明るいところで服を脱いで、裸を全部、君に見られるのは初めてね。」

「う、うん……。」

お姉さんはお腹の所でタオルを自分の身体に掛けているのみでそれ以外は一糸まとわぬ姿になつている。



「服を脱ぐと胸が垂れたりしないかいつも気になっちゃって。」

「ぜ、全然そんなことないよ。」

お姉さんは着やせの次元を超えて、服を脱ぐと、とんでもなく大きい乳房になっていた。どこに隠していたんだ。今の補正下着とか、そういう風になっているのか。ここまで大きく膨らんでいると、大きさに圧倒されて形とか何でもよくなってしまう。

「やっぱり、若い子に自分の裸を見せるのは恥ずかしいわ。」

「い、いやいや、お姉さんも十分、若いでしょ！」

「そうね、年の事を気にするようになったら余計老けるから、そうしないようにとは思ってもね。」

お姉さんは随分と気にしているが、そう言えばお姉さんって一応、人妻だったんだよなと改めて思う。僕の場合は大人になったから解禁される様々な事を堪能したいから早く大人になりたいと思っているし、お姉さんにも釣り合えるようになりたいと思っているが、お姉さんはお姉さんで僕との歳の差を気にしているのかもしれない。自分の年齢とそれでやれる事を楽しむ

境地になれるのは、楽しいことを覚えてからなんだろうな。と思っていると。

「お、お姉さんは綺麗だから……そういうことは気にしないでいいよ。」

「あら、ありがとう。」

いつの間にか口をついて出てしまい、お姉さんも嬉しそうである。よしよし、僕も気が利くようになってきているぞ。

「君に言われると、とっても嬉しい。」

「そ、そうなんだ。」

と思ったらお姉さんにクリティカルな返しをされてしまった。

「ね、背中を向いて、椅子に座って。」

「す、座るんだ。」

お姉さんに背を向けて、椅子に座ると。

「……んっ。」

ぷにゅんっ。

「わ、あ、ああっ。」

お姉さんに泡の付いた体で後ろから抱き着かれてしまい、手が……僕の身体の前の方に触れている。今は肩辺りで僕の鎖骨を撫でられているが、肩回りを丹念になぞったら、今度は……胸の方とかにも触れられてしまい、頂を指先でくりくりと回すように押し撫でられている。

「お肌……とつても綺麗なのね。泡で洗うと、柔らかくて、すべすべしていて。」

「そ、そうなんだ。自分じやあんまりよく……あつ。」

ちやぷんと水の跳ねるような音がしたら、僕の耳がヌリヌリと洗われていくのを感じていると。

「んっ、んんっ、あっ。お、お姉さん？」

「……かぷっ。」

「ううっ!？」

お姉さんに抱き着かれて愛撫されながら、耳を噛まれてしまった。

「ちやぷ……ふふ。ここも綺麗にしてあげないとね。」

むにゆんっ、ふにつ、くちゆくちゆっ。

「あ、あ、ああっ、お、お姉さあんっ。そんなにしないでいいよおっ。」

僕はそうなるまいと思っても、声から力が抜けてしまい、フニヤフニヤした言い方になってしまう。

「ふふ、大丈夫。最後まで面倒見てあげるから。」

「さ、最後って？ ああっ!？」

くちゅくちゅつ。

再会してから

僕の乳首を両側から弄っていたお姉さんが片手だけ奥に進んでいく。お腹を撫で、おへそまで綺麗に撫でられていく。お姉さんの指は細くしなやかだから、簡単に僕の身体の深くにまで沈んでしまい。

「やっぱり……綺麗な肌。身体はとっても薄いのに、細いと不思議と惹かれてしまう……。」

くちゅんつ。

「ああああっ!？」

いつの間にかぴよこんと首を出してしまっていた僕の身体の男の子の部分に触れられてしまうと、手のひらで包むようにくりくりと回されて、首を完全に出されてしまう。

「あつ、ああつ、あああつ？ うあ……つ。ああつ！」

くちゅくちゅくちゅつ、ねちゅねちゅ……。

背中ではお姉さんの乳房が肩甲骨の回りまでなぞるように動かされ、前の方では乳首を撫でられながら、袋の方まで丹念に肉棒を揉み込むように洗われて、股関節回りも自分でもそこまですないくらいに丹念に洗われていく。

「お、おねえさんっ。そこまでしてくれなくていいからっ。」

「いいえ。こういう行為だから、とっても綺麗に洗うものなのよ。」

「う、ううっ。あっ!？」

お姉さんが僕のお尻にまで触れてしまう。

「い、いやだっ、そこは……っ、ああっ。」

ちゅぽ、ちゅぽ……っ。

「大丈夫。怖がらないで……ここも、気持ちよくなれるから。」

「ううっ、うううっ、あ……っ!？」

いつの間にか乳首を弄っていた手が僕の肉棒に触れ、ぐちゅぐちゅと扱かれるようになる。

「あっ、あっ、あああっ、あああっ、ああっ!？」

で、出ちやう。おチンポから出ちやうよおっ!？」

「そう？　なら……こっちも気持ちよくなれないと。」

「えっ？　あああああっ!？」

お姉さんの指が僕のお尻の奥深くまで入り込んだと思ったら……僕のおちんちんの後ろ当たりのような位置で指が探るように動いていると。

「……あつた。ここが君の。」

ぷにゅんとした感触がしたと思ったら、その時点で僕の意識は飛んでいた。

「ああ……あひあああ……っ。いいっ!？」

びゆくんっ。ぶしゅっびゅっ！

「あ……あつ。お尻なのに……そんなあつ。」

僕は一瞬で果ててしまい、呆然としてしまっていた。

「ちゆく……ペロッ。君も、とっても可愛かったわよ。」

「あうう……あつ、あああ。」

お姉さんは僕の耳を舐め、抱き着いた格好で暫く僕のお尻に指を回しながら、肉棒から出し切るまで扱っていた。

お姉さんとお風呂でエッチ

「さあ、今度は私の膝に座って。」

「こ、今度はどうするの？」

「私の方を向いて、向かい合ってしましょう？」

「う、うん。あつ？」

むにゅんつ。

お姉さんに抱き着くように乳房が顔と言うか首辺りに埋まるのを実感すると、その柔らかさを堪能するまでもなく、顔に埋められてしまう。

「んっ、んんっ。」

僕の身体はあつという間に反応してしまい、また大きく首を出してしまうと。

「お姉さんも、準備は大丈夫だから……入っちゃいましょうね。」

「う、うん……ああっ。」

んちゅつ。

粘着質な感触がしたと思ったらお姉さんの中に僕のが入り込んでしまう、と同時にお姉さんにお尻を両側から掴まれてしまい、僕の身体が掲げられてしまった。

じゅくつ、じゅくつ、じくつ。

「あつ、ああつ、お、お姉さあんつ。からだ、動いちやうよおつ。」

「いいの、最初は動きを覚えて……これが、私の気持ちいい速さと動きだから。」

「う、うううつ。ああつ。」

いつの間にか僕まで腰を動かしてしまい、それに合わせてお姉さんの腰も動いている。

「んあつ、ああつ、やっぱり君……感じている時の顔も可愛い……っ。」

お姉さんはいつの間にかお姉さんの乳房に顔を埋めている僕の顔を見ながらうつとりした表

情でいる。片手が僕の頭の方に来たと思うと優しく撫でるように抱きしめられてしまい。

「お、お姉さん？ あああつ!？」

にじゅうう……つ。

もう片方の手でお尻を掴むように握られると、割れ目の方から指を伸ばし、アナルフックをするようにお尻を指で吊られてしまう。

「あああつ、ああつ!？ お、お尻はいやあツ!？」

僕は女の子のような声を出してしまい、お姉さんにお尻を揺すられながら腰を振ってしまう。

「ね……つ、このまま出しちゃいましょう?」

「いやあつ、ああつ、ああつ? あ、あ、ああつ。お尻でいくの、覚えちゃうよおつ! お尻が……つ、壊れちゃうよおつ。」

「いいの……出したくなったらいつでもいいのよ。おチンポ、パンパンでしょ?」

「う、うん。おチンポ、パンパンだよおつ、出しちゃう、出しちゃうっ。」

「ほら、出して……。」

にゆりっ。

お姉さんが再び、僕のお尻の中でぷにゅんとした肉厚の壁に当たるとアナルフックのような形で入り込んだ指をぐりんと回されてしまった。

「ああああっ！ あああっ！ 出ちやううっ！」

びゅくんっ、びしゅびしゅびしゅっ！

「あ……あつ、また、出しちゃった……お尻なのに。」

「いいのよ、いっぱい出して……私の寂しかった子宮に、君の精液が入ってくれるなら……。きつと卵子も喜んでくれるわ。生きていることを思い出させてくれるって……。」

「……そうなんだ。」

お姉さんが最初からこういう行為をさせてくれるのって、つまりはそういう事なのだろう。喪失した経験が無いから僕には想像力を巡らせることしかやれないが、今、僕とお姉さんがしているのは、新しい命を育む行為だったのだと、僕は改めて行為について思ってしまった。

・
・
・
・
・

ちやぶんつ。

「お、お姉さん。入る時も前からなの？」

「ええ。そうすると、抱っこになるでしょ？」

それから。僕とお姉さんでお風呂に入ったのだが。お姉さんに前から抱き締められるように、お姉さんが湯船に座り、それに乗るように僕が入ることになってしまった。

「お、お姉さんっ。どうしてこんな……恥ずかしいよ。」

「大丈夫、君はとっても可愛いわ。」

「うう……っ。」

いつの間にかまた、お姉さんの乳房に身体が埋もれるようになってしまい、頭を撫でられ、もう片方の手でシツカリ背中を抱きしめられているからとても柔らかな感触を味わうようになってしまっている。

（僕、こんな生活を毎日続けていて、墮落しない自信がない。）

既に当初の、かつこいい大人になるという決意が揺らいでしまっているが。

「……ふふ、可愛いわね、本当に。」

お姉さんの嬉しそうな表情を見ていたら、何もかもを流し去ってしまいそうだから本当に洒落にならない。

「お、お姉さん。僕は……こう見えても、かつこいい大人になりたいんだけど。」

精一杯、かつこつけた表情でお姉さんを見ると。

「やだもう、本当にかわいいんだから！」
「うわっ。」

お姉さんに抱きしめられてしまった。

「お、おねえさあん……やめてよおっ。」

僕は声が出てしまうと。

「ねえ、君。」

「うん。」

「君も、かつこいい大人になりたくても、あんまり無理はしないでね。

厳しくしようとしても、それで自分の体と心は傷つけないようにして。

そうすれば、他の人にも優しくなれるようになるから、そうしてあげて。

そのために、家では甘えられる人がいるんだから。」

「……うん。」

「君が甘えて、癒された分、また、元気になれるようになれば。」

君の元気な姿を見て、それで元気になれる人だっているの。」

「そうなんだ。」

「そうよ。私がそうだから。それを頭の隅にでもいいから入れておいて。」

お姉さんはやっぱり、そういうところでも僕よりも経験はずっと先に行っているんだろう。触れていいのか分からないからそのまましていると。

「明日は、あいさつ回りが終わったら、お化粧して、外に出てみましょうか。」
「で、出ちゃうんだ。」

お姉さんは相変わらず、僕のそういうところまで気に入ってしまっているようだった。

お姉さんと、お休みなさい

「わあ、似合うわよ。」

「う、そうなんだ。」

僕はボクサーパンツに近いパンツは穿いたままなのだが。そのインナーに重ねるようにドロワーズ、ブラジャーぐらいの丈のキャミソールのようなインナー。更にそれに羽織るようにフオークロア調の、ひらひらしてフリルもレースも付いているけど、現代的にシンプルになったネグリジェのような、前開きのワンピースのような服を着ている。ドロワーズを穿いているから、裾がふんわりと広がるようになっていた。ちよつとだけドロワーズの裾も覗いている。頭にもリボンのついたヘアバンドのようなのを巻いている。

「男の子がそういう格好をするのって可愛いわ。」

「へ、へー。」

「ええ。とっても似合っているわ。」

「う、うん。」

お姉さんが僕をべた褒めしているが、悪い気はしなくて、しかもちよつと、ドキドキしてい

る僕。

「最後は、お姉さんのピローミストを布団に掛けて。」

「あ、いい匂い。」

石鹼のような淡い匂いでふんわりと癒されていると。

「今日は疲れたでしょう、お姉さんと寝ましょう？」

「うん。」

僕はお姉さんの言葉にさっそく乗ってしまい、布団に入ると。

「パジャマに着替えて、二人で布団に入るのって久しぶりね。」

「そうだね、お姉さんに化粧を教えて貰った時、以来かな。」

「そうね。あの頃から君は綺麗だったわ。」

「お、お姉さん。恥ずかしいよ。」

「いいの……私はあの頃から、君に持ったら許されない感情を持っていたかと思っていたから。」

お姉さんは僕を懐かしい目で見ている。

「今日、私と行為をしたけど、大丈夫だった？」

「大丈夫って言うか、よく分からないまま、終わっちゃったから。

凄く、気持ちよかったのだけは覚えているけど。」

「……そうね。私も、君には……甘えちゃっているのかもしれないわね。」

「そうなの？」

「ええ。君がここに来て、私が思うようになってしまったて。」

「それは……あんまり気にしなくていいよ。僕もお姉さんの負担になつていないかなって。」

「そうなんだ。」

「そうだよ。いいよ、このくらいだったら。」

「ふふ、ありがとう。」

お姉さんはお姉さんで僕の接し方を気にしていたようだ。それは……僕としては、僕の方が甘えすぎだと思っていたから意外だったが。そこで僕が図に乗ってしまったら墮落の一步だろ
う。

「そんなことを言っていたら、もつとすごいことをしちやおうかしら。」

「え!? あれよりもつと、すごいことつてあるの!？」

「あるわよ。していいつて言うならしちやおうつと。」

僕はお姉さんの底知れなさに驚いていたが。

「……ちよつとずつ、だからね？」

「ええ。ちよつとずつね。」

その言葉にドキドキしてしまったのを気付かれないように、照れるように答えてしまっていた。

再会してから

2022年 3月26日 初版

奥 付

発行 白石華

著者 白石華

イラスト とさか

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)